

お兄ちゃんが大好きな妹は実は 「プロの妹」だったようです

酒井仁

挿絵／なるみすずね

立ち読み版



(えっ……いま、目が合った……?)

「お、おおっ？　ちよ、こつち見て笑ったぞ、勇吾！」

「い、いや、偶然だる偶然」

だが、たしかにそのとき勇吾は美人教師の視線を感じた。

章一には申し訳ないが、あの視線は勇吾に対して向けられたものだど直感する。

(いやいや、自意識過剰だ。まあ、なにかの機会にお近づきになればいいな)

にわかになくなる頬を見られる前に、勇吾はなおやにさがる章一を引きずるようにして教室に向かったのだった。

そして午前中の授業が終わり、昼食の時間。弁当持ちの生徒は弁当を広げ、そうでない生徒は学食に向かう。

勇吾は妹お手製の弁当を持たされているが、章一はパン食のようだ。だが一人で学食に行くのは寂しいと章一が駄々をこね始めた。

「なあなあ、一緒に学食行こうぜ、なあなあ」

「やめろ、男がかわいこぶるんじゃない、気色悪い。まあ、そうだな、午前中の体育で腹減ったし、たまには外で飯にするか」

「そうこなくちゃ」

男二人で連れ飯というのも空しいものだが、ちょっと甘いものが欲しかったところだ。

章一は総菜パンとジュースを、勇吾は野菜ジュースと菓子パンを一つ買って中庭に出るところにした。

「ベンチはもう空いてないな。あそこの樹の下で食おうぜ」

校舎に囲まれた中庭にはいくつかベンチが設置されているが、どこももう生徒が占領している。緑の生い茂った木の根元に腰を下ろし、弁当を広げる。中庭を吹き過ぎる風が心地よい。

「おい、勇吾。あれメアリー先生じゃん。生徒と一緒に飯食ってるぞ。俺らも混ぜてもらおうか」

「やめとけ、女子ばっかじゃないか。それに俺たち、あの先生の授業受けるかどうかかわからないんだぞ」

面識もない男子がこのこ近づいたら、どんな目で見られるか知れたものじゃない。それにどうやら、赤毛の女教師の周りにいるのは一年のようだ。

(……ということは、由真の奴もあの先生の授業受けるのかな)

弁当は、勇吾の好物ばかり入っていてうまかった。

いつもの母の弁当なら友人におかずの一つも恵んでやるところだが、今日ばかりはそんな気にならない。

「なんだよー、けちけちしやがってー」

人でなしと罵られようが、心は一ミリも揺るがない。

普段は不愛想だが、この弁当には間違ひなく妹の愛情がたっぷり込められているのが感じられる。

アスパラのベーコン巻きにきんぴらごぼう、ほうれん草の胡麻よごしに卵焼き。どれもこれも実に勇吾の好みの味付けた。

(あいつ、いつの間にかこんな料理上手になったのかなあ。そういや小六の頃に作ってもらったことがあったけど、あれは参ったなあ)

あの頃はまだまだ甘えん坊で、「大好きなお兄ちゃんのために」早起きして作ってくれた弁当のご飯の上には、そぼろ卵でかでかとハートマークが描かれており、クラスでからかわれたのもいい思い出だ。

(ま、高校生にもなつてハートマーク弁当を渡されても困るけどな……ん?)

北側校舎の廊下で、少女の髪が鮮やかに煌めいたように見えた。

由真の金髪かと思つたが、そうではない。白く輝く銀の髪が二筋。長い髪を頭の両側でくくつたツイントールの少女だ。

「由真の他にもあんな娘がいたのか……転校生かな。おい、章一」

「なんだよ」

「あその廊下に、銀髪の子が……あれ、いない」

「あ〜〜っ、もう! やつと見つけたッ」

聞き慣れた声に顔を上げると、金髪碧眼の美少女が少し息を切らせて勇吾を見下ろしていた。

「なにふらふらうろつき回ってんのよ、馬鹿兄貴!」

「なんだ、なにか用だったか?」

兄の言葉に少女の顔がほんの少し赤く染まる。勇吾が一人でないので、少し気まずそうにミニサイズのタッパーを押し付けてくる。

「わ、渡すの忘れたのよ、食後のフルーツ! た、体育の後はビタミン補給が大事なんだからねっ」

「お〜っ、やつさしいなあ由真ちゃんは。兄貴の健康にまで気を使ってくれるなんて、なんてできた妹だ」

「あたしは、別に……お弁当箱とタッパー、洗わないと後でひどいんだからね!」

「お、おう。悪いな由真」

昼食を食べて教室に戻ると、クラスメイトの女子が勇吾の顔を見てにやにやしている。

「……なに?」

「新居くん、来てたよ、妹さん」

そうか、フルーツを持ってくるならまずは教室に来ただろう、と思いがたたる。

「いや、前々からきれいな子だなあって思ってたけど、本当に美少女だね！ しかも新居くんがいなくておろおろしてる姿がもう、超萌えええええ」

「人の妹に勝手に萌えないでくれるかな……」

「私も見た見た、あれは一見の価値ありだよねー。金髪きれいー。外国人の血が入ってるの？」

「あ、ああ。母方のひい爺さんがオーストリア人、だったかな」

よほど目立っていたのだろうか、他の女子もわらわらと寄ってきて口々に由真の噂話を始める。

聞けば勇吾が教室にいないのでフルーツが渡せない……と涙目で困っていたところを、クラスの女子があそこでもない、ここでもないと世話を焼いてくれたようだ。

「それはすまなかつたな。妹が世話になった」

「ううん、あんな可愛い妹さんならいつでもお世話してあげるよ。そういえば、妹さんもお兄ちゃんの面倒見るのがうれしくて仕方ないみたいだったしねー」

「ねー」

なんだか妹を出汁にして女子にもさんざんからかわれてしまった勇吾だった。

「帰ったぞー。洗剤ってこれでよかったのか」

放課後、妹にメールでお使いを頼まれた勇吾は、スーパーで洗剤を買ってから帰宅した。台所では今晚の夕飯を任された由真が煮物の火加減を見ているところだった。

(筑前煮か……僕の大好物じゃないか)

「洗剤は洗面所の下、わかってんでしょ。カバン置いたら遊んでないでお風呂掃除でもしてよね」

「へいへい」

てきばきと家事をこなす様は母親を思わせて微笑ましいが、ああ当たりのきつい言い方をしなくてもいいんじゃないか、と少しだけムツとする。

幼い頃はどこに行くにも勇吾の後をついて回って、置いてけぼりにでもしたら大泣きするような少女だったのに。

「章一の奴の気持ち少しだけわかったような気がするよ……」

ちらりとキッチンを覗くと、少女はデニムにTシャツとラフな格好。

幼い頃はいかにも女の子の子した格好が好きだったが、いつの頃からか中性的な服装を好んで着るようになった。

(その割に、体つきはやけに女の子っぽくなっただけだな。って、妹をそんな目で見てどうするんだ、僕)

後ろ姿をまじまじと眺めていたなどと気付かれたら、最低でも痴漢兄貴、変態兄貴呼ば

わりは間違いないところだ。

煩惱を追い出すために、浴室の隅々までぴかぴかになるほど風呂掃除に励んでいると、夕飯ができたと由真が声をかけてきた。お湯張りボタンを押してから食卓に向かうと、二人分とは思えないご馳走がずらりと並んでいる。

勇吾の好物の筑前煮に蕪かぶの味噌汁、生春巻きに揚げだし豆腐、そしてメインは鱈さわらの西京焼き、そして香の物が数種類。

炊き立てご飯の輝くような艶が湯気の向こうに見え隠れする。身体を動かしていたこともあって、胃がぎゅるとはしたない音を鳴らすと、少女はくすりと一瞬笑ってからすぐにそっぽを向いた。

「さつさと食べちゃわないと片付かないから！」

「お、おう」

両親も出張先で羽根を伸ばしているのかもしれないが、この夕飯を食べ損ねたのは正直痛恨の痛手だろう。金髪美少女の作った純和風（一部ベトナム）料理は勇吾もうなるほどの出来栄えだった。

筑前煮の塩梅よく、蕪にもしっかり味噌の味が染みている。生春巻きは野菜がシャキシャキと美味しく、揚げだしは出汁の一滴まで飲み干したい。そして何より焦げる手前の西京味噌と白身魚との相性はご飯をぐいぐい進めさせる。

兄に対する口の利き方は悪くとも、この料理の出来栄えは由真の好意の表れと思うことにする勇吾である。

「うむ、うまいうまい。おかわりっ」

「そのくらい自分でよそつて。新婚夫婦じゃないんだから」

新婚、という言葉に喉が一瞬詰まりそうになる。

言われてみれば今夜は自分と妹の二人きり。手作り料理を差し向かいで食べてるなんて、なるほどたしかに新婚夫婦に見えなくもない。

(いやいや、新婚夫婦じゃない、これは兄と妹の家族の食卓だ)

実の妹を異性のように錯覚しかけた気持ちを、首を振って打ち消す。

「? ……なにか味、変だった?」

「いや、どれもこれもうまいよ。あ、そうだ。今日学校で、銀髪の女の子を見かけたような気がしたんだけど、お前知ってるか」

「銀髪……? 赤毛の新任教師じゃなくて」

「いんや。僕と章一が中庭で飯食つてるときに廊下を歩くのを見た……ような気がしたんだ。女先生は中庭にいたから別人だ」

「……巨乳先生も見てたんだ」

なぜか、じと目で兄を睨んでくる妹に、理由もなくたじろいでしまう。

「じよ、女子に囲まれて食事してるのを遠目に見てただけだ！二年はまだ授業ないみたいだけど、一年はあのメアリーとかいう先生の授業あるんじゃないのか」

「しーらない。ていうかあたし英語嫌いだし。赤毛で巨乳の女教師も、巨乳の好きな変態兄貴も知ったこっちゃないし！」

そう言つてぷうと頬を膨らませてしまふ。

(なぜここで不機嫌になるんだ……これはまさか、外国人の血を引く者同士、バストサイズのライバルとも思つていいのか!?)

たしかに由真の胸は同学年の少女に比べるとなかなかのサイズ。

だが現時点ではメアリー教諭の方に一日の長があるように思う。いや、大きさだけが正義ではないぞと余計なことを言いかけて、かろうじて口をつぐむ。

(しかし、由真も知らないということは、あの銀髪の子は部外者だったのか？でも制服を着てたような……あれ、あまり覚えてないな)

章一も見えてないらしいし、単に見間違ひだったのかもしれない。その話はそれきりにして、せつかくの妹の手作り料理を堪能する。

「ふう、ご馳走さま。あ、洗い物手伝おうか」

「いい。兄貴手際悪いから、かえつて時間かかる」

「むう……」

にべもなく断られる。

「それより、一服したらちっちゃとお風呂はいつちやってよ、兄貴」

「あ、ああ」

何気なくそう返事をした時、不意に「どくん」と胸騒ぎがした。

(なんだろう……このまま先に風呂に入ったら、何かトラブルが起こりそうな予感がする)
何のトラブルが、ということまではわからないが、ほとんど確信に近くそう感じる。

たとえば由真がスクール水着を着て勇吾の背中を流しに乱入してくるといったような、突拍子もない……、

(いやいやいや、あの由真がそんなことするわけないだろう。なにを考えているんだ僕は。けど、このまま先に風呂に入ったら、間違いなく何かとんでもないことが起こりそうな気がしてならない……)

鼓動は激しく高鳴り、体中が熱く火照ってくる。原因不明の身体異常に胸を押さえっていると、洗い物をしていた妹が声をかけてきた。

「兄貴ー？ だから、お風呂ー」

「い、いやっ！ そうだ、み、見たいテレビがあつたんだよ、忘れてた！ これはどうし
てもリアルタイムで見たいから、風呂はお前が先に入ってくれよ」

「えー？ まあ、いいけど……」

「そうしてくれると助かる」

今日は大した課題もないので明日の準備を手早く済ませ、勇吾はリビングのテレビをつける。

「警察二十四時！ 大捜査線スペシャル」とかいう特番で、もちろんそれほど見たかったわけではない。危険走行を続ける珍走団をパトカーが追いかける様子を見るともなく眺めていると、さあああああ……と雨音が聞こえてきた。

「うええ、降ってきたよお……洗濯物溜まってるのに」

「乾燥機でいいんじゃないか？」

乾燥機では微妙に匂いが残る、とぶつぶつ文句を言いながら浴室に向かう由真を見送ってなおテレビを見ていると、そのうちにごろごろ……と雷の音までしてくる。

「マジか、こりゃ本格的な雷雨だな。ええと、予報は……」

データ放送に画面を切り替えると、雷雨警報が出ていた。

そうこうしているうちにも、不機嫌な雷雲の音が近づいてきているような……と思っていた矢先だった。

どおおんっ。

「うお!! ち、近いぞ」

咄嗟に窓に目をやると、カッ、と白い光が瞬き、勇吾は頭の中で数を数える。

一、二、三……八秒を数えたところで「どんっ」と落雷音。

(ええと、音の速さが秒速三三〇メートルとして、八秒ということは約三キロ弱か)

これは昔見た映画で得た知識。

突然の雷に怯える幼い娘に、父親が冷静に対処しているシーンで、稲光と落雷音の差から雷雲が今だいたいどこにあるかを探るといふ豆知識だ。

再び窓の外が光ると同時に秒数を数えると、今度は五秒で落雷音が響く。つまり、雷雲は約一七〇〇メートル付近、現在接近中ということだ。

ふと、風呂に入っている妹のことが心配になる。

(雷を怖がるような年齢でもないけど、ええと、懐中電灯は)

ソファから腰を浮かせたまさにその瞬間、窓の外が白く染まるとほぼ同時に「どおおおんっっ!」と地面を揺るがすような衝撃が走った。

「ぬああっ?」

それと同時にリビングの明かりが消え、辺りは闇に包まれる。

「ま、まさか家に落ちたんじゃないだろうな。えっと、防災袋は玄関か……あいてっ」

ソファにつまづきながら玄関に向かい、下駄箱の中の防災袋から懐中電灯を取り出す。闇の中では懐中電灯の小さなランプと言えど頼もしい。

そこからまっすぐに風呂場に向かうと、やはり闇に包まれた浴室はしんと静まり返っている。

「……おい、由真、大丈夫か？」

「あ、兄貴？」

懐中電灯の明かりに気付いたのか、ざばりと浴槽から上がる音が聞こえた。

「なになに、なんなの、停電？」

「みただいな。ご近所の様子を見てないからはつきりとは言えないけど」

「ちよ、行かないで！　こんなの、聞いてないよう〜」

いつもの強気な態度はどこへやら、少女は怯えた声を漏らす。雷雲はまだ不機嫌な音を立てて、いつまた落雷するか知れたものではない。

「落ち着けて、さっきのが一番近かったから、もう遠ざかっていくはずだ」

「ほ、本当？　ううう嘘ついたら許さないんだから……」

ぴかっ。

「きゃああっ！」

風呂場の窓が白く光り、すりガラスの扉にぼんやりと肌色の影が浮かぶ。こんな時だというのに妹が裸身であるということに気付き、どきりとしてしまう。

「由真、おちっ」

どどんっ。ほんの二秒ほどで落雷音が轟く。さっきの衝撃ほどではないが、その音に驚いた少女はがらりと浴室の扉を開け、勇吾に飛びついてきた。驚いた拍子に懐中電灯を取り落としてしまう。

(うおおおおお~~~~っ！)

少女は自分が全裸だということも忘れ、ひつくひつくとしゃくりあげながら必死にしがみついてくる。

反射的に抱きとめると、濡れた素肌に触れてしまい、その温かさにはばし陶然としてしまう。

(あ、温かいっ、柔らかいっ……それに、石鹸のいい匂いだ……ッ！)
むにゅっ、ぷにゅんっ。

自分と由真を隔てているのは、勇吾の着ているたった一枚のシャツのみ。たった一枚の布地を通じて、マシユマロのような乳房の感触が伝わってくる。

昔はちっちゃくて頼りなくて子どもっぽかった妹の思わぬ成長を感じ、勇吾の頭はくらからする。思わず抱きしめた背中では骨なんか感じさせないほどふわふわと柔らかく、滑らかできめ細かな肌触り。

年相応以上に発育した少女の裸身を抱きしめているのかと思うと、心臓が飛び出そうなほど高鳴り、甘い体臭に体の一部が反応してしまいそうになる。

(駄目だ、は、は、反応するな……鎮まれ〜ッ！)

「ひつく……ひつ、やだよお……怖いよおお……」

怯えた少女の声と体の震えに思わずハッとす。

(そうだ、いまこの家には僕と由真の二人しかないんだ。僕が由真を、妹を守らなくちゃいけないんだ！)

「ゆ、由真、大丈夫、だいじょうぶだから」

「ひつく……ひつく……」

今は言葉をかけても通じそうにない。せめて落ち着くまでこのままでいようと、勇吾は覚悟を決めて闇の中で妹を抱きしめる。

さっきまで湯につかっていた湿り気と熱に少女の体臭が混じって、鼻孔をくすぐる。兄の胸板に押し付けられ、ふにゆりと変形した少女のふくよかな膨らみを通じて、怯えた鼓動が伝わってくるようだ。

その弾力、ポリリウムを感じるだけで再び体の一部がおかしな反応を見せてしまいそうになり、勇吾は自分の理性に懸命のエアールを送る。

(落ち着け、由真は雷で動転してるだけだ。由真は僕の妹、血の繋がった実の妹、妹に抱きつかれたからって、別にどうってことはない。このほわほわのおっぱいの感触なんかなんてことない……って考えるなあ〜っつ)



「はあ……私、兄さんのおちんちんをしごきながら、おっぱいを揉まれているのね。もっと強く揉んでもいいのよ兄さん。だつてほら……もうこんな」

片手で男根を弄りつつ、由真は器用にブラのホックを外す。

たつぷりとポリウレームのある肉球がブラからこぼれ出ると、揉まれていない方の桃色の突起はたしかに固く充血していた。

（僕におっぱいを揉まれて……感じてるのか、由真が……）

興奮で頭の芯がカッと熱くなる。無意識に手を動かし、さらに「むにゅ、むにゅ」と乳房を揉みしだくと、金髪の美少女は「あつ、あん」と悩ましく悶える。

「そこ、その先っぽが気持ちいいの兄さんっ。指でつまんでくれたら、きつともっと……あはあんっ」

もはや自分で自分が止められない。指先につまみ上げたニップルを「くり、くりっ」と捏ねると由真は金髪を振り乱して甘い声で鳴く。

「はうんっ、兄さんの指が、由真の乳首をくりくりしてる……ああ、それにおちんちんがすごく熱くて元氣よ、兄さんっ」

茎をしごき立てる速度がどんどん上がっていき、妹の手の中で肉棒は耐えきれないほどの快感で満たされていく。陰囊が縮み上がり、熱い溶岩のような欲望がせり上がってくるのを感じた。

「あつ、すごいです、兄さんのおちんちん、ぴくぴくしてるっ。由真にしごかれて気持ちいいの？ 気持ちいいんでしょ兄さんっ」

「だ、駄目だ由真、それ以上されたら……うああああっっ」
びゅるっつ、どびゅっつ、びゅるるるっつっ。

勢いよく噴き出した白いシャワーが宙に弧を描き、目の前の女体に降り注ぐ。

「きや、熱……どくどく出てるうっ」

快感の強烈さに思わず乳房から手を放し、突き上げる射精感に身を任せる。

びゅっ、びゅるっ、びゅばっ。

強烈な臭気が立ち上って少女を包み込み、由真は兄の体液の匂いにふるふると興奮を禁じ得ないように震える。

粘っこい濃厚な液は垂れ落ちることなく乙女の金の前髪に、白い頬に、鎖骨や肩口にまで張り付いて、白い柔肌をさらに白く染める。

少女は茎の根元から絞上げるように最後の一滴まで指にまぶしつけると、うっとりとその指を目の前まで持ち上げる。

「すごい……これが兄さんの子種なのね」

粘液に舌を伸ばしかける妹を見て、勇吾は思わず「おいっ」と声を上げた。

「ふふ、これを舐めるだけで妊娠してしまいそうよ兄さん。ほら、見て……」

金髪の美少女は粘液まみれの指で自らのニップルをつまみ、兄の精液を突起物に塗りつける。にちゃ、にちゃと薄闇の中に淫らな音が響き、その妖艶としか言いようのない光景に、勇吾はイチモツが再び膨張していくのを感じる。

「またこんなに大きくなって、まだ出し足りないのね兄さん」

「い、いや、そうじゃな……うあぁっ」

す……と身体を前に倒すと、由真は両手で乳房を寄せ、ぼすりと肉球の谷間に兄の茎を挟み込んできた。

少女の谷間は仄かに温かく、弾力に富んだ肉が硬直した肉棒を圧迫してくる。乳房にもたつぷりとぶちまけられた粘性の高い体液のぬめりで、首の後ろがぞわりとするほど心地よい。

「兄さんのおちんちん、熱くて硬い……さっきあんなに出したのに、少しも小さくなってないのね」

由真は両手で肉球を持ち上げ、茎の根元から圧力をかけると、先端が白い肉に埋もれてしまう。そして今度は手の力を抜くと、乳房は重たげに下がって先端から裏筋を絶妙な力で擦っていく。

谷間から顔を覗かせた亀頭に唇を近づけると、少女は「たら……」と涎を垂らし、まぶしつける。「にちゃ、にちゃ」と唾液と精液の混じった液が湿った音を立てて、潤滑油と

なる。

「由真……ど、どこでこんなことを」

「いつか兄さんに喜んでもらおうと思つて、いろいろ勉強したのよ。もちろん、兄さん以外の人にしてあげたことなんてないわ」

潤滑油のお陰で滑りやすくなったのか、少女は一定のリズムで乳を上下に揺すり、兄の男根を責め立てる。

時に強く、時には緩やかに乳房で肉棒を包み込むように。先端が谷間から突き出るたびに、てらてらとてかり輝く亀頭が妹の唇に触れそうになって、どきりとする。

（ううっ、また胸の奥が熱くなつてきた……）

どっ、どっ、どっ、どっ……これはただの興奮がもたらす高鳴りではない、ような気がしてきた。妹に邪な感情よこしまを向ける罪悪感、いやそうではない。

勇吾の身体の奥からこみ上げてくるとてもない活力、パワー、熱情。そんなものが少年の理性を根こそぎにしようとするどんだん熱を高めていくような気がする。

（このままじゃ、僕は本当に由真を……）

そして、何より由真自身がそれを望んでいるようにしか思えない。

兄と妹の禁断の一線を越え、男と女の関係を結びたがっているのだとしたら、自分はそんな妹の思いに応えるべきなのか。

「あん、先っぽからまたエッチな匂いがしてきたわ、兄さん。さつきあんなに出したのに、まだまだ出したいのよね」

「につちゅ、につちゅ、にゆる、にゆるんっ。」

由真は涎を追加し、さらに激しく乳を揺する。

唇の端に垂れた涎をれろりと舐め取るその仕草は、まるで優美な洋猫が発情しているようだ。興奮に目を赤らめ、息はさつきよりも荒い。うつすらと額に汗をかく妹の姿は恐ろしく淫らだ。

「もう……もう、我慢できないわ兄さん。兄さんのおちんちんが、こんなにエッチな匂いをさせているから……っ」

「ま、待て由真っ……うああっ！」

さらり、と金髪がこぼれ、少女の横顔を隠す。

次の瞬間、勇吾はイチモツの先端が温かな湯に包まれるのを感じた。

否、顔を俯かせた由真が、亀頭を口に含んだのだ。少女の口の中は体温よりも高いのか、先端だけが風呂に入ったような感覚に勇吾は快美の呻き声を上げた。

「ん、んふう……兄さん、痛かった？」

上目遣いに見上げる妹の唇と亀頭が唾液の糸で繋がっている。凄まじいばかりの破壊力に、胸の高鳴りはいつそう速く、心臓が弾け飛びそうだ。



何か、開いた音がした。

「確かめさせてほしいの。あなたの中に眠る、未知の力を……！」

しゅばあああああつっつ。

勇吾の視界が青白い光で満たされる。得体の知れない力が身体の奥底から漲みなぎってきて、頭の芯を焼き尽くしそうだ。

「うあああああああツツツッ！」

「コアパーツは中立派にとつてもお宝なのよ。ごめんね、ちよつと覗かせてもらうわ」

両手で勇吾の頭を挟むようにすると、メアリーの手のひらから目に見えない「何か」が伸びて勇吾の頭の中をかき回すイメージが吹き荒れる。

どくんっつっつ。

どくんっつっつ、どくんっつ、どくんっつ。

この感覚は以前にも覚えがある。由真とのハプニングの中で興奮した時の胸の異常な高鳴り。だがいま勇吾を襲っているのはそんなものとは比べ物にならないレベル。

「すごい……本当に本物だわ。え………?’」

むくっ、みりみりみり……メアリーの膣内しおで萎れていたはずのペニスしおが、完全復活……いや、それ以上の大きさにまで異常増大している。

堅さも、太さも、長さまでもが膨張し、ただでさえ窮屈な膣内しおが内側から押し広げられ、

メアリーは「かはっ」と咳き込んだ。

「やだ、なにこれ、勇吾くん、新居勇吾くん！」

「うおおお……うあああああああ」

だが勇吾は獣のように呻くだけで、すっかり意識が飛んでしまっている。

がばりと身を起こすやメアリーの骨盤を両手で掴み上げると、咆哮と共に「ずんっ！」と女芯を貫いた。

「ふぎっ!？」

怪物的巨根と化した肉の柱が、メアリーの子宮に激突した。

子宮を押しつぶさんばかりの強烈なアタックに一瞬意識が飛びそうになる。

「ちょ、ちよつと、待ってまって……ひあああつ！」

骨盤を固定したまま、ぐいと腰を引くと、ずるるると長大な茎が半分ほど引き抜かれる。だがすぐさま根元ぎりぎりまで突き入れ、ねじ込んで子宮を圧迫する。

「ふぎゃんっ！だ、だめ、完全に本能だけで動いてる……こ、コアパーツの暴走？あつ、待つ……ひぎいいい……ッッッ！」

ずるるる……ずしんっ。ずるるる……ずどんっ。

深く、重い一撃を何度も何度も叩きつける。骨盤が割れそうなピストンに、しかし成熟した女体は引き裂かれることなく、ギリギリのところまで受け入れている。

「ひゃいつ、ひゃひいつつ。な、なにこれ、こんなすごい……」

「うおおおつ、おおおうつ、おううつつ！」

がっしゅ、がっしゅ、がしゅがしゅがしゅがしゅ。

ピストンと言うよりもむしろ掘削と言っているほど荒々しいセックスに、いつしかメアリーの顔は愉悦にとろけていた。

大人の女の優位などもうどこにもない。謎のパワーによって凶暴化した少年の極悪ペニスに陵辱されるといふ、被虐の快感に目覚めている。

「ひいいいん、すごいいつ、こんな初めてええつ」

「ぐおおおおおおおんつ」

「変えられちゃうつ、私のスケベま〇こが極太ちゃんぽの形になっちゃううつ！」

自分の中にM気質があるということ、メアリーは初めて知った。

内臓を突き上げられるようなピストンを食らうたびに、快感が背中から脳天まで走り抜け、打ち上げ花火のように弾ける。愉悦の花火は連続的にメアリーの精神をかき回し、焼き尽くし、理性を失わせる。

「ぐあああああつ」

性の猛獣と化した勇吾はメアリーの骨盤から手を離した。

だがペニスを抜くのではなく、深々と突き入れた状態でぐいつと上体を反らしたのだ。

ぶひゅっ、びゆるびゆる〜っつ。

圧迫された美女の巨乳から、白い液体が吹き出す。

妊娠もしていないはずの成熟した乳房から、あたかも興奮の極みに達した証のごとく母乳が吹き出し、勇吾の顔や上半身を濡らす。

辺りに甘く狂おしい母乳の香りが立ち上り、そこにメスの愛液の潮の香りが入り混じって濃厚で淫らな空気がどろりと部屋を満たす。

「ひゃふう、ひゃっ、ひきいいい……っ。らめえ……イツちゃ、い、イグウウ」
「ぐおおうっ！」

ずずん、と強烈な突き上げと共に、メアリーの下肢がびん！と伸びる。

内臓ごと突き上げられる衝撃に、メガネ美女は「がぼっ」と喉を鳴らして口から透明な胃液を噴き出した。

「がふっ！ えふう……らめ、え……おちんぼに、躡けられちゃう……おちんぼのメス奴隷にされひゃうう………ッッ！」

身も心も蕩けきった赤毛巨乳美女の目が、驚きに見開かれた。

子宮を突き破らんばかりにねじ込まれた超巨根が、「ぶわりっ」と膣内でさらに膨張し、ついに溜めに溜めた欲望が噴出したのだ。

「ぐあああああああああ！」



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ?



ドキドキラブな
ハーレム系ライトノベル!

二次元
ドリーム文庫

サイズ:文庫

戦うヒロインが屈服されちゃう!
かなり過激なライトノベル!

二次元
ドリームノベルズ

サイズ:新書

※二次元ドリーム文庫とは異なる。美満の方に入ってください。

日常に密着したエロス、リアルな
舞台設定で送る官能小説レーベル!

リアルドリーム文庫

サイズ:文庫

フリーダム度120%!?
ジャンルにとらわれないドキドキ★ラノベ!

あとみっく文庫

サイズ:文庫

詳しくはKTCの
オフィシャルサイトにて!

キルタイム

検索



電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!



あなたのキモチイをお手伝い!

キルタイムのアダルトコミック誌!

業界唯一! エロラノベ&エロコミック満載!!



二次元ドリームマガジン

魔法、催眠、性転換...不思議Hコミック誌!



コミックアンリアル

フェチをテーマにツキ抜ける作品群!!



プリズム

KTCといえば闘うヒロインアンソロ!



メガミクライシス

詳しくはKTCの
公式サイトにて!

キルタイム

検索



書店、書籍通販サイトなどで好評発売中!
※いずれも18歳未満の方は購入できません。

コミックス同人誌版も発売中!

全国の同人誌ショップ、キルタイムコミュニケーション通販にて取り扱っております。

KTC サイト <http://ktcom.jp/>



title:

ノブナガ繚乱!

lineup:

『明智の策略』

トキサナ

『DSの流儀』

chaccu

『生徒会長前哨戦?』

天道まさえ

title:

発情期なアダム

lineup:

『いつもの学園生活』 天道まさえ

『天使の誘惑』 ウメ吉

『ELECTRIC LOVE』 空木次葉



電子書籍版もあります!

各種ダウンロードサイトにて発売中! ※18歳未満の方は購入できません。



ヴァルキリー



<http://www.comic- Valkyrie.com/>

cranberry



<http://www.cran-berry.com/>

mille-feuille



<http://www.mille-feuille.jp/>

モバイル二次元ドリーム



<http://www.2d-dream.jp/>



KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!